

## 図書館の貸出統計からみる学生像

塩 沢 千 文・玉置すみ子・翠 川 舞・永 井 貴 子・田 中 仁

Student Image Suggested from Book Circulation Statics in the Library

Chifumi SHIOZAWA, Sumiko TAMAOKI, Mai MIDORIKAWA,  
Takako NAGAI and Hitoshi TANAKA

要旨：本稿は，新入生図書館内ガイダンス時のアンケート調査と図書館貸出利用統計を用いて，学生像を考察し報告するものである。

その結果，①近年の入学生は，読書や本に興味のない学生が過半数を占める傾向にあること，②読書や本について興味のある学生は，興味のない学生に比べて図書館の本の貸出が多いこと，③入学以前に図書館の本を利用していた学生は，利用する習慣のない学生に比べて図書館の本の貸出が多いこと，④入学以前に図書館で学習する習慣のあった学生は，習慣のない学生に比べて図書館の本の貸出が多いことが明らかになった。また，⑤館内ガイダンスに参加する学生は，不参加の学生に比べて図書館の本の貸出が多く，⑥館内ガイダンスに参加する学生は，入学年度の前期の貸出が多いことが分かった。

これらのことから，読書支援の必要性を認識し，図書館の諸活動が貸出冊数に影響をあたえている可能性があると考え，読書支援が本学図書館の課題であることを明確にした。

Key words：飯田女子短期大学図書館 (Iida Women's Junior College Library)，図書館利用 (library use) 貸出統計 (book circulation statistics)，読書支援 (reading support)

### はじめに

飯田女子短期大学（以下本学という。）図書館の前回の報告<sup>1)</sup>では，本学看護学科生の3期生（平成13年3月卒業）から7期生（平成17年3月卒業）までの図書館の貸出冊数を学年ごとに比較し，看護学科生の図書館の貸出利用行動を捉え，平成14年度から16年度までの看護学科教養講座参加者のアンケート調査結果と図書館の貸出冊数との比較を試みた。その結果，①入学当初の図書館の貸出利用は，学生の個々の関心・興味による借出しのニーズであったが，学年があがるごとに共通した分野の資料を求める傾向にあること，②読書嗜好（読書や本の話に興味があるかないか）図書館利用嗜好（図書館を利用する習慣があるかないか）については年度によりバラツキ

があること，③入学以前に図書館の本をよく利用し，図書館で学習する習慣があった学生は，本学入学後の図書館の貸出冊数が多いこと，④学年があがり，特に3年次には全く差がなくなることが分かった。貸出冊数については，本学平成16年度卒業生の在学中の1年間の一人平均貸出利用冊数が，11.6冊であり，全国の短期大学生の平均6.0冊に比べて多かった。また，看護系私立短期大学学生の平均は18.3冊であり本学の看護学科学生の19.7冊は平均的な数値と評価された。この結果からも家政学科・幼児教育学科の学生に比べ看護学科の学生の図書館の資料の貸出冊数が多いことは一般的な傾向であるとしてきた。そして看護学科の学生が，本学の一人平均貸出冊数を高めていることが予測され

た。

今回、平成18年度と平成19年度において新入生館内ガイダンスを全学科対象に行うことができた。そこで、前回の結果をもとに分析を試み、本学の学生像を捉えることができたので考察を加えて報告する。

## 1. 館内ガイダンスとアンケート調査の実施

平成14年度から看護学科教養講座「情報の集め方 検索のしかた」の中で行った図書館館内ガイダンスを、平成18年度より全入生対象に行うことになった。各クラスアドバイザーが空き時間を利用して館内ガイダンスの設定をした。館内ガイダンスの内容は、これまでの手法を踏襲し、小規模な図書館であっても、やみくもに本を探すことがいかに困難であるかを体験し、請求記号や検索データから配架場所を読み取り、書架に行くことの効率を体感できるよう考えた。館内を一巡して図書館内の構造や配架の仕組みを図書館職員が学生に説明した後、実際に本を探す作業を行わせた。探す本のリストは、各学科の関連分野の資料を取り入れるように学科・コースごとに変えた。リストの裏面はこれまで同様にアンケート調査用紙を付して、館内ガイダンス終了後に回収した。アンケートの回答から入生を8群に分けた。

### 1) アンケート調査

#### (1) 方法

#### (ア) 調査対象および分析対象

館内ガイダンス参加者の中で年度途中、学籍に移動のあった学生を除き、分析の対象とした。

平成18年度参加者 187名

分析対象者 177名

平成19年度参加者 213名

分析対象者 213名

#### (イ) 調査日

平成18年 4月12日 平成18年 4月17日

平成18年 4月21日 平成18年 4月24日

平成18年 4月25日 平成18年 4月26日

平成19年 4月13日 平成19年 4月16日

平成19年 4月17日 平成19年 4月18日

平成19年 4月19日 平成19年 4月20日

平成19年 4月24日 平成19年 4月26日

平成19年 4月27日

#### (ウ) アンケート項目

前回までは「図書館の本を借りて読む」という行動を中心に展開し、次の二つの設問を用いた。回答は二択とした。

設問1；これまでの自分は図書館の本を読む習慣があったかなかったか。→「どちらかといえばなかった」と回答した学生は、設問；本を読むことや、本のことについての話に興味がありますか？に回答を求めた。

設問2；これまでの自分は、図書館で勉強する習慣があったかなかったか。

回答結果から学生を次の6群に分けた。

1群 図書館の本を利用し、図書館で学習をした。

2群 図書館の本を利用したが、図書館での学習はしなかった。

3群 図書館の本は利用しなかったが、読書や本に興味があり、図書館で学習をした。

4群 読書や本に興味があるが、図書館の本は利用せず、図書館での学習もしなかった。

5群 図書館の本を利用することや読書や本に興味がないが、図書館での学習はした。

6群 図書館の本を利用することや読書や本に興味がない、図書館での学習もしない。

1・2群は「入学以前図書館の本を利用した群」で3～6群は「入学以前図書館の本を利用しなかった群」である。しかし「図書館の本を借りて読む学生は、読書や本に興味がある学生であるといえるだろうか」と平成17年11月に行われた長野県図書館大会大学専門図書館部会における指摘を受け、今回は設問

の3項目全てに二択の回答を求めた。設問は従来と同様に、

設問1；入学前の自分には、図書館の本を借りて読むという習慣がありましたか？

設問2；入学前の自分には、読書をするこことや、本のことについての話について興味がありましたか？

設問3；入学前の自分には、図書館で学習をする習慣がありましたか？

である。

そして、前回と同様に

設問4；図書館オリエンテーションと今回の図書館内ガイダンスについて感想をお書き下さい。今後の参考にしたいと思えます。

と、自由記述覽を付した。

## (2) 結 果

アンケートの回答から学生の入学前の読書嗜好と図書館利用嗜好を、読書嗜好の有無を中心に次の8群に分けた。1群から4群は「読書や本への興味のある群」で5群から8群は「読書や本への興味のない群」である。

1群 読書や本への興味があり 図書館の本を利用した 図書館での学習習慣あり

2群 読書や本への興味があり 図書館の本を利用した 図書館での学習習慣なし

3群 読書や本への興味があり 図書館の本を利用しない 図書館での学習習慣あり

4群 読書や本への興味があり 図書館の本を利用しない 図書館での学習習慣なし

5群 読書や本への興味がない 図書館の本を利用した 図書館での学習習慣あり

6群 読書や本への興味がない 図書館の本を利用した 図書館での学習習慣なし

7群 読書や本への興味がない 図書館の本を利用しない 図書館での学習習慣あり

8群 読書や本への興味がない 図書館の本を利用しない 図書館での学習習慣なし

嗜好の尺度は前回と同様に、個人的で利他的な感情となる自己評価である。各群の該当

者数とその割合を表1に表し、各学科・コース別の人数を表2に表した。また前回の調査との比較をするため看護学科学生について6群の分布を8群と合わせて表3に表した。共通する群は3・4・7・8群である。3・4群は「図書館の本を利用しないけれども読書や本に興味がある」群であり、前回に比較して人数は減少している。7・8群は「読書や本に興味がなく、図書館の本も利用しない」群である。

その結果、平成18年度と平成19年度は各群ともほぼ似た割合で分布していた。平成14・15・16年度と比較すると、看護学科においても8群(前回の6群)の占める割合が多くなっていた。前は3年間の数値に変動があり、年度によって入学生像は違うと判断した。しかし2年間連続して同様の結果を見たので、これを近年の本学入学生像と予測してもよいのではないだろうか。読書や本について興味のない学生が増えている傾向は、緊急に対応していく必要があると考えた。

表1 平成18・19年度入学生の群別の人数および割合

群	平成18年度入学生	平成19年度入学生
1群	32名 (18.1%)	42名 (19.7%)
2群	31名 (17.5%)	28名 (13.1%)
3群	11名 (6.2%)	12名 (5.6%)
4群	21名 (11.9%)	28名 (13.1%)
5群	3名 (1.7%)	6名 (2.8%)
6群	5名 (2.8%)	6名 (2.8%)
7群	17名 (9.6%)	15名 (7.0%)
8群	57名 (32.2%)	76名 (35.7%)
計	177名	213名

表2 学科・コース別 群別人数

(単位：人)

	1群		2群		3群		4群		5群		6群		7群		8群	
	平成18年度	平成19年度	平成18年度	平成19年度	平成18年度	平成19年度	平成18年度	平成19年度	平成18年度	平成19年度	平成18年度	平成19年度	平成18年度	平成19年度	平成18年度	平成19年度
生活造形	1	1	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	3
保健養護	7	3	4	2	0	1	3	3	1	0	0	0	2	3	16	5
生活福祉	4	5	0	7	5	2	2	3	1	0	1	1	5	1	11	17
食物栄養	3	5	5	1	0	1	6	4	0	1	0	0	0	2	4	10
幼児教育	0	5	3	4	2	0	4	3	0	1	0	2	1	2	7	12
福祉心理	0	3	3	4	3	3	3	4	1	1	1	4	2	2	1	16
看護	9	10	8	5	1	2	3	7	0	0	3	1	6	5	15	12
地域看護学専攻	8	6	6	3	0	3	0	3	0	2	0	0	1	0	0	0
助産学専攻	—	2	—	1	—	0	—	1	—	0	—	0	—	0	—	1
福祉専攻	—	2	—	0	—	0	—	0	—	1	—	1	—	0	—	0

表3 看護学科学生の群別人数の変化

(単位：人(%))

今回の群(前回の群)	平成14年度	平成15年度	平成16年度	平成18年度	平成19年度
1群	—	—	—	9 (13.8)	11 (25.6)
2群	—	—	—	8 (12.3)	5 (11.6)
3群 (3群)	9 (17.6)	7 (11.5)	8 (14.2)	1 ( 1.5)	2 ( 4.6)
4群 (4群)	8 (15.7)	16 (26.2)	14 (25.0)	3 ( 4.6)	7 (12.2)
5群	—	—	—	0 ( 0)	0 ( 0)
6群	—	—	—	3 ( 4.6)	1 ( 2.3)
7群 (5群)	7 (13.7)	5 ( 8.1)	3 ( 5.4)	6 ( 9.2)	5 (11.6)
8群 (6群)	7 (13.7)	14 (23.0)	3 ( 5.4)	15 (33.3)	12 (27.9)

## 2) 貸出統計と館内ガイダンス

図書の貸出統計は、図書館総合管理システム『情報館v. 6』を使用して集計した。

前回の調査における看護学科学生の貸出冊数は、学年が上がると各群の差がなくなり、各群の差があるのは1年次であった。また特に3年次は、貸出される資料分野も専門の資料が繰り返し貸出される傾向にあることから、3年次の貸出と教科内容との関連があることが示唆された。

今回は全学生が館内ガイダンスの機会を得

ることができたので、本学学生の各群の貸出数の特徴を調査するため平成19年度卒業生について在学中の貸出状況を分析した。看護学科の3年間に比べて家政学科・幼児教育学科は2年間と在学期間が短いため、さらに前期と後期とに分けて比較することにした。

## (1) 館内ガイダンス実施が及ぼす貸出冊数の変化

館内ガイダンスの実施が貸出冊数の数値にどのように影響しているのかを知るために、館内ガイダンス実施前(平成16年度卒業生)

と実施後（平成19年度卒業生）の在学中の一人平均貸出冊数の比較を行い表4にまとめた。

その結果、家政学科家政専攻の生活造形コース（平成16年度は生活デザインコースと称した）と保健養護コースは増加し、幼児教育学科の幼児教育コース・福祉心理コースは減少し、また、在学中に貸出を行わない0冊者の人数は増加していた。この比較においては館内ガイダンスの実施が在学中の貸出冊数に変化を及ぼしていると考えられなかった。また、平成15～19年度までの5年間の入学生の入学年度の貸出冊数を比較し表5に表した。しかし、数値は年によってバラツキがあり、館内ガイダンスの実施と在学中の貸出冊数との関連は明確にできなかった。

そこで、館内ガイダンス参加者と不参加者の一人平均貸出冊数を平成19年度の入学生の数値を用いて、前期と後期および一年間の比較を行い表6に表した。

その結果、館内ガイダンス出席者の一人平均貸出冊数は前期7.1冊、後期4.8冊、年間では11.9冊であり、欠席者は前期3.8冊、後期4.4冊、年間では8.2冊であった。

出席者は欠席者に比べて一人平均貸出冊数

は高かった。また、館内ガイダンス出席者は後期になると一人平均貸出冊数が減少するのに対して、欠席者は増加しており、ガイダンス出席者と欠席者の差は小さくなっていた。このことから、館内ガイダンス実施は、入学年度前期の一人平均貸出冊数に影響をしていると予測できた。

図1に示したように、平成18年度に比べて平成19年度が全体に高く、1年次の前期と後期の比較では、平成18年度と平成19年度ともに後期に比べて前期の一人平均貸出冊数が高いことがわかった。

### 3) アンケート調査分析と貸出冊数

アンケートの回答と貸出冊数との関連をみるため、各群の一人平均貸出冊数を調査した。平成18年度および平成19年度の入学生を8群に分け、1年次の一人平均貸出冊数を表7にまとめた。1群と8群の差は大きく、入学までの学生の読書嗜好や図書館利用嗜好が、入学後の貸出冊数に影響すると考えられる。

前回の調査においても、入学以前に図書館の本をよく利用し、図書館で学習する習慣があった看護学科学生は、本学入学後の図書館の貸出冊数が多かった。

表4 学科・コース別在学中の平均貸出冊数と貸出0冊者数の変化

	平成16年度卒業生		平成19年度卒業生	
	在学中の平均貸出冊数(冊)	貸出0冊者人数(人)	在学中の平均貸出冊数(冊)	貸出0冊者人数(人)
生活造形	1.8	3	18.0	3
保健養護	12.1	6	21.0	10
生活福祉	4.5	11	4.9	9
食物栄養	26.1	3	26.5	3
幼児教育	15.4	5	4.6	20
福祉心理	14.1	2	11.9	15
看護	59.3	0	68.8	0
地域看護学専攻	25.1	0	38.2	0
助産学専攻	31.1	0	14.0	0
福祉専攻	3.2	6	17.7	1

次に、設問ごとに集計し、1～4群と5～8群とに分けて「読書や本の話に興味がある学生とない学生」の一人平均貸出冊数の比較を表8に、1・2・5・6群と3・4・7・8群に分けて「図書館の本を借りる習慣がある学生とない学生」の一人平均貸出冊数の比

較を表9に、1・3・5・7群と2・4・6・8群に分けて「図書館で学習する習慣のある学生とない学生」の一人平均貸出冊数の比較を表10にまとめた。その結果、設問項目全てが入学後の貸出冊数と関係していることが明らかになった。

表5 学科・コース別 入学年度の平均貸出冊数の変化

(単位：冊)

	平成15年度入学生	平成16年度入学生	平成17年度入学生	平成18年度入学生	平成19年度入学生
生活造形	0.0	8.3	4.0	8.4	5.8
保健養護	5.5	4.3	6.6	5.9	13.5
生活福祉	3.3	2.4	2.2	3.6	3.7
食物栄養	10.4	8.8	9.6	10.0	7.5
幼児教育	7.2	7.9	7.5	1.3	7.8
福祉心理	7.3	17.5	6.9	2.9	9.3
看護	14.2	7.9	7.0	7.7	11.7
地域看護学専攻	23.9	25.3	32.1	27.9	38.2
助産学専攻	20.1	31.5	3.6	26.1	14.0
福祉専攻	10.9	3.2	9.7	7.4	17.7
全体	9.4	9.6	8.2	8.0	11.3

表6 平成19年度館内ガイダンス出席者と欠席者の平均貸出冊数

(単位：冊)

	年間	前期	後期
ガイダンス出席者	11.9	7.1	4.8
ガイダンス欠席者	8.2	3.8	4.4

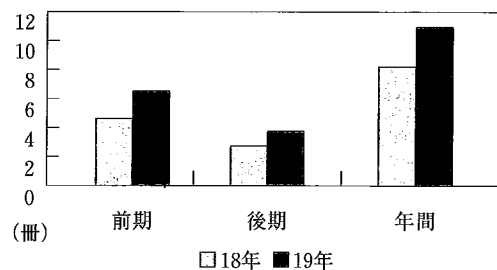


図1 平成18・19年度の1年生の平均貸出冊数の前期と後期の比較

表7 群別の平均貸出冊数

(単位：冊)

	1群	2群	3群	4群	5群	6群	7群	8群
平成18年度	8.2	7.7	1.2	2.2	5.3	0.0	1.2	1.9
平成19年度	12.6	7.7	11.1	9.3	4.0	4.8	6.5	2.9

つまり、読書や本に興味のある学生は図書館の本をよく借りる、以前から図書館の本を利用していた学生は入学後も図書館の本をよく借りる、以前から図書館で学習する習慣のある学生は入学後も図書館の本をよく借りるといえる。

#### 4) 入館者数

図書館の入館者数の測定は、図書館の入り口にある入館カウンターでカウントし、日々の記録から集計をしている。

平成18年度と平成19年度の月別入館者数の推移を図2に示す。

入館者数は、図書館が学生に支持されている場所であるかを測定する数値である。

学業日における(8月・3月を除く)一日平均入館者数は、平成18年度216人平成19年度は211人であった。本学在学者数(5月1

表8 読書や本の話に興味がある学生と  
ない学生の平均貸出冊数

(単位:冊)

	1・2・3・4群	5・6・7・8群
平成18年度	5.9	1.8
平成19年度	10.4	3.4

表9 図書館の本を借りる習慣がある学生と  
ない学生の平均貸出冊数

(単位:冊)

	1・2・3・4群	5・6・7・8群
平成18年度	7.3	1.8
平成19年度	9.8	5.3

表10 図書館で学習する習慣のある学生と  
ない学生の平均貸出冊数

(単位:冊)

	1・2・3・4群	5・6・7・8群
平成18年度	5.0	3.4
平成19年度	10.5	5.1

日現在)は、平成18年度655名、平成19年度561名と減少がある。在学者数の減少の影響を加味するならば一人平均の入館回数が増えていると考えられる。

また、図2からわかるように、平成19年度は前期に比べて後期に平成18年度を上回る入館数がある。貸出冊数は、図1のように前期に比べて後期が減少している。このことから、後期は学習などの「場所としての図書館」の利用が増えていると考えられる。

#### 5) 平成18年度と平成19年度の平均貸出冊数の差

これまでの調査結果で明らかなように、平成18年度と平成19年度とでは、平均貸出冊数そのものが増えている。

貸出冊数の分布を見るために、縦軸に貸出冊数、横軸に群をとり散布図を描くと、平成18年度に比べて平成19年度は、非常にバラツキがあり、貸出冊数と各群とは相関がない。たとえば、読書嗜好のない学生の貸出冊数の最大値が、平成18年度では12冊であったのに対して、平成19年度では54冊といったように、説明のできない数名の突出した貸出冊数のデータがある。それらを、入学後であっても図書館に興味をもち、多くの資料に触れてほしいというわれわれが目指しているデータと考える根拠はない。

また、1群該当者の貸出冊数0～数冊や、8群該当者の貸出冊数の高い学生の存在は、前述した、読書嗜好と貸出冊数との関係にお

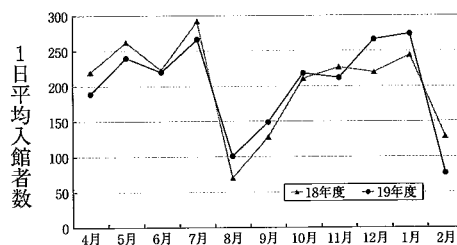


図2 入館者数の推移

いて、逆が成り立たないことを表している。つまり、図書館の本をよく借りる学生は読書や本に興味があるとはいえない、図書館の本をよく借りる学生は入学前も図書館の本をよく借りていたとはいえない、図書館の本をよく借りる学生は以前から図書館で学習する習慣のある学生であるとはいえないのである。

## 2. 平成19年度の図書館の取組みと貸出冊数

平成19年度は本学の図書館が大きく変わった年度である。

開館時間を1時間半延長して学業日の開館を6時半までとしたこと、そして、図書館職員の体制を専任2名から専任1名と非常勤職員3名への変更があった。

さらに、朗読ワークショップと、館内の本の紹介コーナーを充実させた。

「ことばの力」を学ぶ機会を図書館側から提供し、文章に親しみ、ひいては図書館を身近に感じる学生を増やしたいと意図した読書支援である。

読書や本に興味のない学生が多数入学することや、図書館を利用する習慣のない学生もいることから、まずは図書館へ行こうという気持ちにさせ、図書館へ来たなら何かがある

という空間を作り、知らず知らずのうちに読書に親しむ学生を育てたいと考える。このことと図書館の利用との関連は今後の課題であるが平成19年度の記録としてふれておきたい。

### 1) 朗読ワークショップ

#### (1) 朗読ワークショップの実施

玉置がライフワークとする、飯田市立図書館「声の輪」のボランティアグループでの朗読指導を本学学生対象に行った。平成19前期に募集を行い、後期から開始し、5グループが成立し、のべ30回実施した。実施状況を表11にまとめた。

#### (2) 朗読ワークショップ参加と貸出冊数

朗読ワークショップに参加した1年生の貸出冊数は、一人平均22.6冊であった。朗読ワークショップ不参加の学生の平均は10.4冊と参加者の半分以下であった。

朗読ワークショップ参加者の一人平均貸出冊数の前期と後期・年間および不参加者との比較を表6に示す。前期・後期ともに朗読ワークショップ参加者の貸出冊数は高く、平成19年度は読書や本に興味のある学生が集まっているということになる。後期の平均貸出冊数が前期に比べて減少している傾向は、朗読ワークショップ参加者も同様であった。朗読ワークショップ参加と貸出冊数の関連については今後の課題として、もう少し積み重ねたデータで論じたい。

### 2) 本の紹介コーナー

平成19年度後期より、館内にささやかな本

表11 朗読ワークショップ実施状況

福祉心理コース1年(演劇同好会)	有志	11名	7月から6回
幼児教育コース1年	有志	2名	9月から10回
食物栄養専攻1年	有志	1名	11月から2回
生活造形コース2年	有志	3名	11月から4回
地域看護学専攻	有志	4名	11月から8回

表12 朗読ワークショップ参加学生と不参加学生の平均貸出冊数

(単位：冊)

	参加者の前期平均	参加者の後期平均	参加者の年間平均	不参加者の年間平均
本 科	8.6	6.8	15.4	8.3
専 攻 科	32.3	7.0	39.3	23.3
全 体	15.8	6.9	22.6	10.4



の紹介コーナーを設け、他大学図書館のパスファインダー・展示を参考に企画展示を行った。

9月からは「本学学生貸出図書ベスト100冊」、11月からは「今年の受賞作品を選んじやいました」、1月からは「飛び出す!しかけ絵本」を行った。

図書館に行くといふ何かがあるという空間づくりが入館数等に少なからず影響していると考ええる。

### 3. 考 察

本学の学生像を、図書館の貸出冊数の分析から述べてきた。

①近年の入学生は読書や本に興味のない学生が過半数を占める傾向にあること、②読書や本について興味のある学生は、興味のない学生に比べて入学後に図書館の本の貸出が多いこと、③入学以前に図書館の本を利用する学生は、利用する習慣のない学生に比べて入学後にも図書館の本の貸出が多いこと、④入学以前に図書館で学習する習慣のある学生は習慣のない学生に比べて、入学後に図書館の本の貸出が多いことが明らかになった。また、⑤館内ガイダンスに参加する学生は不参加の学生に比べて図書館の本の貸出が多く、⑥館内ガイダンスに参加する学生は、入学年度の前期の貸出が多いことが分かった。

以上のことから、学生の読書嗜好や図書館利用嗜好が図書館の貸出冊数に影響していることやガイダンス等の図書館の取組みも貸出冊数に影響することがわかった。図書館の諸取組みについては、貸出冊数に相乗効果となってあらわれてくることを期待しているが、それらについては今後の課題と考えている。

今回の調査の考察として、国内の諸データを加えて、本学学生の読書支援の必要性を述べてまとめることにする。

### 1) 大学生の読書

本学の学生の読書傾向に関する調査は、昭和57年(1982)に行い<sup>2)</sup>、以降は調査をしていない。当時の本学学生アンケート(回収率66%)結果は、毎日書籍(雑誌やマンガを除く)を読む学生は約7割、一日の読書時間は平均40分、一ヶ月の本代は平均1,320円であった。好きな作家は、星新一、遠藤周作、横溝正史、筒井康隆、松本清張、灰谷健次郎らが並んでいた。

今回本学の入学時のアンケート調査で、読書や本の話に興味がない学生が過半数をしめていることが分かった。また、東京大学大学院教育学研究所で行った2007年全国大学生調査<sup>3)</sup>によると、一ヶ月に一冊も読まない学生は29.0%を占め、0冊から1冊は、57.4%になっている。

これらのことから、読書をしない学生の存在が多いことが容易に推測できる。今後、大学生は本を読むというイメージを払拭し、読書支援が必要ではないかと考える根拠とした。

### 2) 小・中・高等学校生の読書環境

読書環境の改善を目指して、平成9年(1997)学校図書館法の改正により2003年までに一定規模以上の小学校・中学校・高等学校では司書教諭を置くことが義務付けられた。平成12年(2000)には、子ども読書年が制定され、その影響で読み聞かせ活動などのさまざまな読書推進事業が実施されるようになった。また、平成13年(2001)の子どもの読書活動の推進に関する法律では、読書は不可欠であるとし、地方自治体に子ども読書活動推進基本計画の策定を義務付けており、平成17年(2005)には「文字・活字文化振興法」が制定された。こうした読書推進活動および読書環境の改善の成果は、学校読書調査において小学生・中学生・高校生の一ヶ月の平均読書冊数が増加し(図4)、不読者(0冊回答

者)が減少する(図5)グラフに表れている<sup>4)</sup>。

読書支援とは読書環境を整えることでもある。幼い頃からこうした読書環境下に育った学生が入学してくる頃には、読書嗜好も現在とは違う集団となり学生の読書状況も変化すると考える。

### 3) 短期大学図書館における読書支援

「場所としての図書館」が他の施設や教育とのインタラクティブな関係性を築く可能性を模索し、教育的な目的を持つ学生の課外活動と学習とを統合するように支援する環境を大学図書館に創出するという報告がある<sup>5)</sup>。情報社会においては、これまでの伝統的な意味での図書館の資料蓄積・提供機能の重要性が相対的に弱体化するといわれている<sup>6)</sup>。その一方で、これまで延べてきたように、読書や本の話に興味がないと回答する学生の出現がある。

これらのことから、短期大学は読書支援としてさまざまな取り組みを行い、学生を図書館に引き込み、利用を増加していくべきであることが急務であると考ええる。

また、本稿において、読書や本の話に興味

のない学生は、図書館の本の貸出冊数も低迷している傾向にあることを確認したことは、今後の図書館の評価に貸出統計は欠かせないものであると考える。

一般的に、図書館の本を借り出すという行為と読書という行為には違いがあると考えられる。しかし、貸出冊数から学生の読書量を推測することはできなくとも、図書館の貸出冊数は学生像を表すためのひとつの指標になると考えてよいのであろう。

おわりに

本稿は、図書館の読書支援を本学の教員に理解していただき、全学的な取組の成果に繋がることを望み投稿したものである。多くの方のご教示を願いたい。

文 献

- 1) 塩沢千文・木下雅子・片桐充昭：飯田女子短期大学の図書館における利用調査と評価に関する考察。飯田女子短期大学紀要，23，191-211，2006。
- 2) 飯田女子短期大学二十年史編集委員会：飯田女子短期大学二十年史，飯田女子短期大学，1986，pp.333-335。
- 3) 東京大学大学院教育学研究科大学経営・政策研究センター『2007年全国大学生調査』<http://daikei.p.u-tokyo.ac.jp/> (2008. 3. 20)
- 4) 世代間交流プロジェクト「りぷりんと・ネットワーク」：子どもとシニアが元気になる絵本の読み聞かせガイド，ライフ出版，2008，pp.24-30。
- 5) 竹内比呂也：総論 デジタルコンテンツの彼方に図書館の姿を求めて。情報の科学と技術，57(9)，418-422，2007。
- 6) 島田貴史：大学図書館員からみた図書館ポータル。情報の科学と技術，57(9)，423-428，2007。

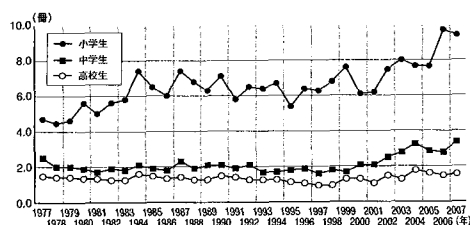


図4 毎年5月1ヶ月間の平均読書冊数の推移<sup>4)</sup>

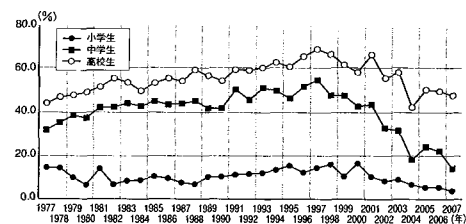


図5 不読者(0冊回答者)の推移<sup>4)</sup>